

「球道無限」二つのドラマ

発刊に寄せて



大垣日大高監督（元東邦監督）

阪口 慶三

いま、わたしの思い出を確かめるために開いた冊子の中に、平成元年、春センバツ 東邦高校優勝時のわたしの監督としての記事が蘇るように心に止まった。

その中から二つの感動を書いてみたい。

——決勝延長戦、10回表に1点リードされた東邦の裏の攻撃は、無死の走者を出したもののエンドランの失敗で一瞬にして2死走者なしの局面になっていた。

上宮の投手は涙をうかべていた。勝ちを意識した感激の表れてあったのか。一方、2死になるやいなや、東邦の投手はブルペンで投球練習を始めた。ここに至って次回の投球を信じたのである。

2死から四球、そして内野安打で走者一塁、二塁となった。劇的な決定打はセンター前であった。二塁走者生還、同点、そして、想像を絶する守備の乱れ。無人のライト方向へホールが転々とする、一塁走者もホームへかえってくる、その時、先に生還した走者が歓喜の表情で、土埃にまみれたホームベースを清めるように、手で払いポンと叩いたのである。「さあどうそこがホームベースです」。

この爆発した歓喜の中で、なにか当然のように余裕のある行為、なにが彼をそうさせるのか——。わたしは不思議な感激に打ちのめされた。相手チームには残酷とも思えるこの行為。しかしこの若者にはそれがただただ輩への祝福と歓喜の咄嗟の証しだったのだ。

——大優勝旗を持ち、行進する東邦ナインがわたしの前を通り過ぎようとした時、紫紺の大旗を一段と高く上げてくれた。後に続く子どもたちが横目でニコッと笑ってくれる。「準優勝旗でないよ。先生」。笑顔がそう語っている。

優勝すると言って優勝したナインの諸君、よくそついてきてくれた。本当にありがとう。

宿舎で大勢の報道関係者に囲まれる中、部屋の片隅で「金メダルの半分はお前のものだ」とナインから、アルプススタンドで応援していた部員に金メダルがかけられた時、涙した子どもたち、抱き合う子どもたち。そんな光景にわたしはまた涙がこぼれた。

この記事は試合の中のドラマではない。

だが、ふだんのあの朴訥なる子どもたちが無意識のうちに演出した、この計り知れない気遣いのドラマに、わたしはなんの掛け値もなく人間の凄さ、素晴らしさを感じるのだ。そして、それは野球というスポーツを通して艱難辛苦を克服し、高校野球の頂点に立った若者たちの人間的成長が自ずと、もたらしたものと言って間違いないだろう。まさに「球道無限」の深遠をみた思っていた。

監督として40年余。

わたしの思い出の中に錯綜する悲喜交々の強烈な実践のドラマ。喜びのシーンは薄れても反省の痛みは疼くように残っている。

まだまだ学ばねはなるまい。

さかくち けいそう
東邦高校の監督として
春、夏の甲子園計24回出場。
第61回選抜大会優勝。

「日本一のチーム作り」を目指して

(1) 指導者(阪口慶三)の考え・生き方

私は「たかやぶ野球、されど野球」で38年間(昭和42年~平成17年)、東邦高校で教師 監督をやリ、生徒たちの夢である「甲子園出場」そして、「全国制覇」を目指し、白球を追って魂のある毎日を送って来ました。(丈夫な体に育ててくれた親に感謝しています)

どの世界でもそうですが、一つの事に人生をかけるという事は素晴らしいと思うし、男のロマンを感じます。私は、子供が大好きです。だから、子供たちの「夢」が達成した瞬間の笑顔 素振りを目のあたりで見たり「俺は生きてるんだ」と思った時。私は(指導者) 最高の幸せを感じます。

教育者として、また、監督として責任を果たせた時、言葉に言い尽くせない感動に酔えるんです。

(2) 「日本一」になる指導方針

① 「心技体」の調和的なバランスの大切さ

高校野球の原点は人間形成である。決してプロ選手を育てる「養成所」ではない。心を育て、思いやりを育み、全てに感謝の気持ちを持たせ、心の豊かさを身につけさせる事がチーム力となり、チームワークのエネルギーとなっていく。

レギュラーと補欠の相互理解に繋がるケースが生まれ、全員野球となって勝利に向かっていると確信する。

私は、自らの体験を通して、「心技体」の調和的なバランスが勝負していく上で極めて大切な要素であることを38年間学び続けた。

② 「文武両立」の教育の徹底化

私の大切な指導理念に「文武両立」の教育の徹底化がある。勉強に真剣に取り組む姿勢がなければ、「好きな野球」に打ち込む魂に欠けるのである。

前任の東邦高校では、毎週、月曜日を休みとしてきた。その理由として、①勉強の遅れを取り戻す②疲労を取る③一週間の目標を書かせ提出させる等々である。

こうしたライフスタイルを維持する事によって、多くの成果を挙げることが出来た。(甲子園出場 春13回・夏111回、全国優勝平成元年春、準優勝52年夏 63年春、甲子園での勝利数25勝等々の記録がある)

③ 大切な進路のお世話

高校生生活3年間の集大成として大切にしなければならぬ事は、3年生の進路決定である。

私は、毎年精力的に生徒の進路には相談に乗ってやり、決定させてきた。こうした、アフターケア的要素は、中学生の子供を持つ両親にとっても安心して学ばせられる学校という事になり、有能な生徒確保対策として大切な事と心している。

④ 生徒のやる気を生み出す指導

日々の練習についても大切な理念を心得ていなければならない。「練習 練習」では、生徒の顔に魅力を感じない姿となって表出する事が多い。顔や眼の表情に輝き、知識を注入し、興やかな子供らしさを失わせない生氣ある子供に指導すべきである。練習が押しつけ、引き回しの様相では、子供の意識は「やらされている」「しぼられていく」から「生徒」自らの発露によるやる気が表出している姿が大切であり、指導者自身も「指導させてもらっている」といった意識がなければ、勝利に結びつく指導にはならないと考える

(指導理念)

① やって見せ、言って聴かせて、させて見せ、誉めてやらねば人は動かす

② 叱るも誉める心を忘れては、よりよき指導、実らぬものなり

③ 己を責めて、人を責むるな

この3点がグラウンド(心身を鍛える場所)における指導理念である。毎日の練習で子供たちに勇氣 自信 自覚 やる気を最大限に発揮させれば、力の差は歴然となる。

・二流 → 一流にするには、工夫(知恵)だと考える。

工夫(知恵)

となると前述の「文武両立」が必要となる。

「まねて学ぶ」とか「集中力」「メンタル面」もその一つであろう。

又、攻守における「流れ(展開)」をいかに「読む」かが勝負の鍵となる。

この「流れ(展開)」と「読み」を子供たちに教えるのは、指導者の情熱と根気が全てである。

このことは、非常に難解なテーマであり、私の38年間の全てがこのテーマに費やされたといっても決して過言ではない。

(しかし、日本一になるには、日本一になる猛練習は言うまでもない)

(結論)

私は、岐阜県のレベルアップに全力を傾注し、愛知県同様、リーダーとしての自覚を持ち全国制覇をシーズンズでも早く、達成する覚悟である。